

由縁の月

宝暦年間（1751～64）に鶴山勾当によって作曲された地唄です。好きでもない人に身請けされた遊女が、今まで苦界だと思っていた郭を離れたことで想い人に逢うことができなくなった悲しみを、水に映る月影に寄せて嘆く姿を描いたもので、有名な「夕霧伊左衛門」に取材した作品といわれています。

文化6年（1809）、江戸中村座の三世中村歌右衛門が江戸を去る際、お名残狂言で『郭文章』を上演し、伊左衛門や夕霧を待ちわびる件でこの曲を長唄に移して用いたと伝えられています。

これによって、それまで以上に曲が流行し、舞も、各流派で伊左衛門中心の男舞や夕霧中心の女舞などが作られていきました。

冒頭、「憂しとみし」で、胸元から懐紙を取り出し、水の流れのように定めない身の上だった昔を懐かしむ場から始まります。多く用いられる扇子を懐紙に代えて舞って行くところが粋な計らいで、艶やかな手踊りによって、思い人との逢瀬の嬉しさ、別れの辛さ、悲しさなどを格調高く見せていきます。

その後、「今は野沢の一つ水」では、豪華な打掛の後ろ姿を振り返りで見せ、男女がひとつになることを表現します。そして、「すむは由縁の月の影」からは、古風に月を見上げる姿をはじめ、水に映る月の光からかつて思い人と交わした情愛を思い浮かべる姿など、艶やかな舞が続きます。